

## スリランカ都市部の世帯構成の特徴

著者	松下 敬一郎, 西村 教子
雑誌名	関西大学経済論集
巻	52
号	2
ページ	177-192
発行年	2002-09-15
その他のタイトル	Household Composition in Colombo, Sri Lanka
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/4514">http://hdl.handle.net/10112/4514</a>

スリランカ都市部の世帯構成の特徴<sup>1)</sup>

松 下 敬 一 郎<sup>2)</sup>  
西 村 教 子<sup>3)</sup>

## Abstract

In our research, Data from 1981 Population Census of Sri Lanka were retabulated by each household unit for Bambalapitiya and Havelock Town, 3,848 households in total, to show basic statistics and characteristics of the household composition. 1) The proportion of the extend family household is as high as 42.6%. 2) The female-headed households mostly (81.9%) consist of the widowed mother with children and other extended family members. 3) The average age of female household heads is higher than that of male. 4) Burgers seem to have higher proportion of vertically extended family households while Moors and Malays horizontally extended. 5) The average household size is as large as 8.24 for vertically extended family households. It is 5.31 as a whole, which is larger by 1 person than that from an example of a village in Kurunegalla. 6) The proportion of individuals by family type and that by relation to the head for 10 year age group may partly indicate individuals shifting among households of different family type. 7) Cohabitation of children over 20 years of age is observed more often among one parent nuclear family households (over 60%) .

キーワード：スリランカ；国勢調査；世帯構成  
経済学文献季報分類番号：14-21

## 1 はじめに

スリランカの人口センサスは1881年から実施されている全数調査であり、すべての統計調査の基礎となる重要な調査である。実施年によって若干の調査項目の違いはあるが、人口調査からスリランカの人口の静態的および動態的な情報を得ることが可能となり、スリランカにおける人口研究の重要な資料として用いられてきた。

スリランカの人口センサスが人口に関する重要な情報を提供する一方で、松下（1999）で指摘されているように、その報告書には世帯に関する集計結果は記載されていない。世帯主

1) 本研究は平成13年度関西大学学術研究助成基金（奨励研究）によって行った。

2) 関西大学経済学部教授

3) 鳥取環境大学環境情報学部専任講師

との続柄に関する調査項目があるにもかかわらず、世帯構成の詳細を識別するには不十分であり、世帯の家族構成に関する関心は低かったものと考えられる。継続的な都市人口の増加や出生率の低下を経験したスリランカにおいて、世帯構造の変化があったと予想することは容易である。しかしながら、スリランカにおける世帯構造に関する研究はほとんど進んでいない。

松下（1999）は1981年の人口センサスのデータを利用し、クルネガラ県にある一行政村の世帯構成の特徴を明らかにしている。さらに松下（2000）は1988年にガンパハ県農村で実施された悉皆調査をもとに1997年に人口と世帯構成の変動に関する追跡調査を行い、核家族化の事例を紹介している。本論の目的はスリランカ都市部であるコロombo県コロombo市の世帯構成の特徴を明らかにすることであり、都市人口の特徴をより明確にすることを試みる。

## 2 データの集計

### 2-1 データ

本論で利用したデータは1981年に実施された人口センサス（Census of Population and Housing）である。この調査は1881年以降ほぼ10年毎に実施されており、1981年のそれは12回目にあたる。1981年の調査項目は人口と住居に区分され、人口に関する項目は以下の通りである。個人の住居地に関する情報は、1) 県、2) 郡、3) 選挙区、4) 地域区分（都市・農村・エステート）、5) 行政市町村、6) 地区（町・村・エステート）、7) 調査区番号、8) 住居ユニット番号の8項目である。個人に関する情報は、1) 住居ユニット内世帯番号、2) 調査区内個人番号、3) 世帯主との続柄、4) 性別、5) 宗教、6) 民族、7) 国籍、8) 身体障害、9) 年齢、10) 配偶関係、11) 就学状況、12) 最終学歴、13) 識字、14) 就業状況、15) 求職状況、16) 求職期間、17) 求職しない理由、18) 主な職業、19) 従事する産業、20) 従業上の地位、21) 通勤・通学時間、22) 通勤・通学手段、23) 出生地、24) 常住地、25) 常住期間、26) 転居前の居住地の26項目である<sup>4)</sup>。

本論では個人調査項目の1) から10) までを主に利用した。分析対象地はコロombo県コロombo市にある Bambilapitiya と Havelock Town の2つの町である。人口センサスの集計ではコロombo市の人口は58万7,647人であり、Bambilapitiya と Havelock Town の人口はそれぞれ12,310人、11,718人であり両町の人口はコロombo市全体の4%を占める。データの再集計にあたり、世帯の識別を行った。世帯は建物を単位としたユニットを基本単位とみなしているが、ユニット内に独立した世帯が複数存在している場合はそれぞれに新しい世帯番号を付与

---

4) 調査票には氏名を記入する項目があり、実際の調査項目は27項目ある。しかし入力データには氏名が記載されていないので、26項目とする。

し独立世帯として識別した。またスリランカの人口センサスは現住人口主義（de facto）に基づいて行われているので、常住者であっても不在であるケースが少なくなく、訪問者などの常住者以外の人にも含まれている。そのため1世帯内に世帯主および配偶者の両者が不在の場合はその世帯全員を集計対象データから除外し、世帯主との続柄が訪問者やその他となっている場合はその個人を除外した。さらにデータの入力ミスと思われるケースに関しては筆者に可能な範囲で修正を加え、修正が不可能な世帯は集計対象データから除外した<sup>5)</sup>。

このような筆者による個々のケースを再確認する作業の結果、本論において利用したデータは、Bambalapitiyaでは10,283人、Havelock Townでは10,169人の計20,452人であり、センサス人口の85%にあたる。世帯数はそれぞれ1,896戸、1,958戸であり、本論で利用した総世帯数は3,848戸である。

## 2-2 世帯類型の分類

世帯の特徴を明らかにするために、世帯の構造を4類型および9類型に区分する。世帯類型は個人調査項目の世帯主との続柄から推測、識別する必要がある。続柄はデータ集計時に除外した訪問者、その他を除くと1) 世帯主、2) 配偶者、3) 同居子、4) 親族、5) 非親族に分けられている。世帯の核をなす世帯主、配偶者および同居子以外の親族関係の分類コードは親族のみのため、正確な世帯構成を知りうることは不可能であるが、次のような条件にしたがって世帯を分類することを試みた。

世帯類型（カッコ内は世帯類型番号を示す）は大きく単身世帯（10）、夫婦世帯（20）、親子世帯（30）、拡大家族世帯（40）にわけられ<sup>6)</sup>、さらにこれを完全単身世帯（11）、その他の単身世帯（12）、夫婦世帯（20）、親子世帯（31）、母子世帯（32）、父子世帯（33）、縦拡大家族世帯（41）、横拡大家族世帯（42）、その他の拡大家族世帯（43）に細分化する。世帯の分類は表1に示す続柄の構成にしたがって行われるが、非親族者は完全単身世帯を除く8類型で存在していることになる。単身世帯とは世帯主のみの世帯であるが、非親族の同居状態により完全単身世帯（11）とその他の単身世帯（12）に区分している。夫婦世帯は世帯主

5) 修正可能なケースとは例えば個人番号が連続しており、世帯主と同居子の間にあり、世帯主との続柄が同居子となっているが、性別、年齢、配偶関係から世帯主の配偶者であると思われるケースはその続柄を配偶者に修正するなど、個人番号の連続性、性別、年齢、配偶関係から容易に修正が可能な場合をいう。修正不可能なケースとは、世帯主と配偶者が同性である場合、配偶関係にある世帯主と配偶者の配偶関係が異なっている場合（年齢や民族など他の調査項目からも不自然と思われる場合）、配偶者が複数いる場合、親子間の年齢差が、10歳未満である場合（世帯主と配偶者の年齢差がある場合を除く）、親子間で民族や宗教が異なっている場合など多様である。

6) 本論では核家族世帯を夫婦世帯と親子世帯（配偶者と同居しない子）に区分して集計している。

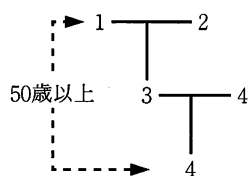
と配偶者のみの世帯であり、親子世帯は世帯主、配偶者および同居子によって構成される世帯を表している。母子世帯および父子世帯は世帯主または配偶者を欠く世帯であるが、調査の性質上死別や離別等の理由による片親世帯だけでなく、調査時に不在であったことによる片親世帯も含まれる。

表1 世帯類型の分類区分

世帯類型 (4区分)		世帯類型 (9区分)		備考
10	単身世帯	11	完全単身世帯	世帯員1人
		12	その他の単身世帯	世帯主と非親族からなる世帯
20	夫婦世帯			世帯主と配偶者からなる世帯
30	親子世帯	31	親子世帯	世帯主、配偶者および同居子からなる世帯
		32	母子世帯	女子世帯主または世帯主不在の配偶者と同居子からなる世帯
		33	父子世帯	配偶者のいない男子世帯主と同居子からなる世帯
40	拡大家族世帯	41	縦拡大家族世帯	① 世帯主と親族最年少者の年齢差が50歳以上 ② 親族最年長者と世帯主の年齢差が25歳以上
		42	横拡大家族世帯	①、②以外で同居子がいる世帯
		43	その他の拡大家族世帯	同居子はいないが親族が同居する世帯

拡大家族世帯はすべての続柄によって構成されており、世帯主の核家族と親族が同一世帯に居住している世帯のことである。その他の拡大家族世帯とは、親族は同居するが同居子のいない世帯である。それ以外の拡大家族世帯を3世代以上の直系家族世帯（本論では縦拡大家族世帯）と傍系家族世帯（本論では横拡大家族世帯）に区分することを試みているが、1981年人口センサスから各世帯の正確な分類を行うことは不可能である。しかし、縦拡大家族世帯は図1に示す続柄パターンが予想されるので、1) 世帯主と最年少の親族の年齢差が50歳以上である、または2) 最年長の親族と世帯主の年齢差が25歳以上である、という2つの条件のどちらかを満たす世帯を縦拡大家族世帯、それ以外を横拡大家族世帯とみなしている。

①第1世代が世帯主の場合



②第2世代が世帯主の場合

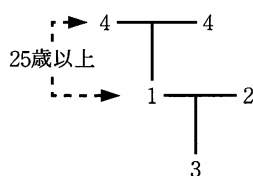


図1 縦拡大家族世帯の続柄パターン（図内の数字は続柄のコード番号）

その結果、3,848世帯の家族類型別分布は図2のように示される。最も高い割合を示して

いるのは親子世帯の29.0%であるが、3つの拡大家族世帯の合計は42.6%となり、核家族世帯の割合が高い農村部の結果(松下:1999, p.140)と比較すると拡大家族世帯が多い。特に横およびその他の拡大家族世帯はそれぞれ18.1%、12.6%であり、都市部の住宅事情が世帯の独立を妨げ、拡大家族世帯を構成するものと思われる。

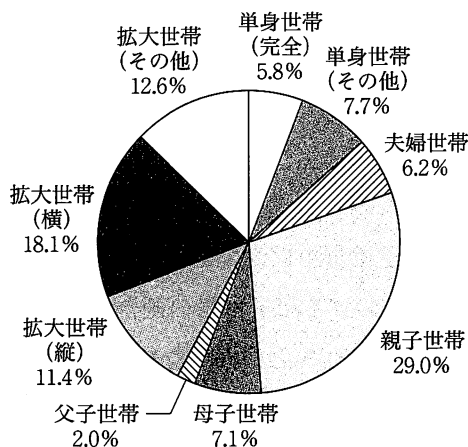


図2 世帯の家族類型別分布 N=3,848

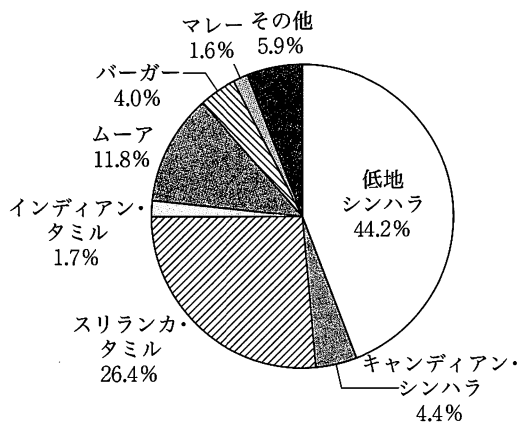


図3 世帯主の民族別分布 N=3,848

都市部ではさまざまな民族が居住しており、人口センサスによると1) 低地シンハラ、2) キャンディアン・シンハラ、3) スリランカ・タミル、4) インディアン・タミル、5) ムーア、6) バーガー、7) マレー、8) その他の8つの民族に分けることができる。図3は世帯主の民族別分布を示している<sup>7)</sup>。低地シンハラ、スリランカ・タミルの割合が高く、全体の70%をこれらの民族が占めている。このように都市部では民族の異なる人々が居住しているため、世帯に関する分析を試みる際には民族による世帯構成の特徴についても言及する必要がある。

7) スリランカでは民族と宗教とは密接な関係にあり、補表は世帯主の民族と宗教についてのクロス集計結果を示している。補表から、主として、シンハラ人は仏教、タミル人はヒンドゥ教、ムーアおよびマレーはイスラム教、バーガーはカソリックまたはキリスト教を信仰していることが確認される。

補表 民族別宗教別世帯主の割合

	仏教	ヒンドゥ	ムスリム	カソリック	キリスト教	その他	合計
低地シンハラ	74.56	0.29	0.35	14.69	9.64	0.47	100.00
キャンディアン・シンハラ	76.33	1.78	1.18	13.61	5.92	1.18	100.00
スリランカ・タミル	1.28	65.62	0.69	16.35	15.67	0.39	100.00
インディアン・タミル	0.00	77.61	5.97	5.97	7.46	2.99	100.00
ムーア	0.22	1.77	96.03	1.10	0.88	0.00	100.00
バーガー	1.30	0.65	0.65	49.35	45.45	2.60	100.00
マレー	0.00	3.33	88.33	3.33	5.00	0.00	100.00
その他	4.39	20.18	25.88	14.91	21.05	13.60	100.00
全世帯	37.01	20.35	14.73	14.55	12.03	1.33	100.00

### 3 世帯主の特徴

#### 3-1 世帯主の性別と民族

世帯主とは本来は各世帯の世帯主を意味するが、本論において世帯の識別の際に、世帯主が不在であってもその配偶者がいる場合は1世帯として分類しており、その配偶者を世帯主としている。世帯総数3,848戸のうち女子世帯主世帯は855戸（22.2%）ある。女子世帯主世帯のうち109戸が世帯主不在のためにその配偶者が世帯主として扱われており、その割合は女子世帯主世帯の12.7%、全世帯の2.8%を占める。

図4に示すように性別による家族類型の分布を比較してみると、男子世帯主世帯の36.7%が親子世帯、40.0%が拡大家族世帯であるのに対し、女子世帯主世帯では32.2%が母子世帯であり、49.7%が拡大家族世帯である。女子世帯主世帯における母子世帯の割合が高いことに対し、男子世帯主世帯に占める父子世帯の割合は最も低い2.6%と対照的な結果を示す。

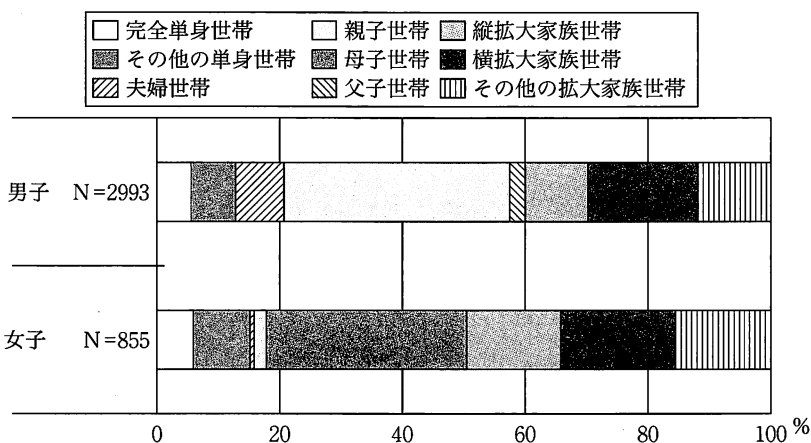


図4 世帯主の男女別にみた世帯類型の分布

世帯類型別に女子世帯主割合についてみると、夫婦世帯および親子世帯においてはその割合はともに1.7%で、夫と同居している世帯では女子が世帯主になる割合は非常に低い。他方、その他の単身世帯、縦拡大家族世帯、その他の拡大家族世帯はそれぞれ26.7%、30.3%、27.0%と四分の一以上の世帯が女子世帯主世帯である。

図5に示された民族別の4区分世帯類型の分布によると、バーガーとマレーについては拡大家族世帯の割合が50%を超えているのに対し、キャンディアン・シンハラとその他の民族は34.3%、29.4%とそれ以外の民族と比べて低い割合を示している。親子世帯はバーガーの27.9%を除くと各民族とも全体の平均となる38.0%と同水準にある。単身世帯と夫婦世帯についてみると、その割合は比較的小さいが民族による差がみられる。キャンディアン・シン

ハラとインディアン・タミルについては単身世帯が他の民族に比べて高くなっており、その他の民族については単身世帯と夫婦世帯の割合が高くなっていることが特徴的である。

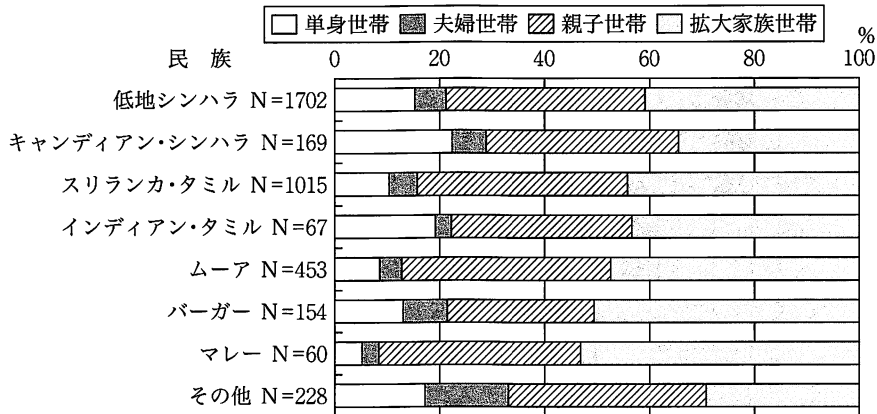


図5 世帯主の民族別に見た世帯類型の分布

### 3-2 世帯主の配偶関係

スリランカの人口センサスにおいて配偶関係は、1) 未婚、2) 有配偶（登録婚）、3) 有配偶（慣習婚）、4) 死別、5) 離別、6) 法定別居に分類される。男女別に世帯主の配偶関係の割合を4区分家族類型別にみると、女子世帯主世帯における死別の割合の非常に高いことがわかる。

図6に示すように、夫婦世帯と親子世帯は世帯類型の性質上、男女ともに有配偶であり、世帯主の配偶関係の男女差は他の3つの類型にみる事ができる。まず、単身世帯についてみると、男子単身世帯は未婚の49.6%と有配偶の45.7%で構成されているのに対し、女子単身世帯では死別が35.6%を占め高い割合を示している。単身世帯は、調査の性格上、夫婦世帯において夫または配偶者が調査時に一時的に不在である場合を含むが、男子単身世帯は未婚または配偶者の出稼ぎや不在により、女子単身世帯は未婚、夫の出稼ぎや不在に加えて死別により形成されている。

親子世帯についてみると、先にみたように男子世帯主世帯は親子世帯、女子世帯主世帯は母子世帯であるといえる。男子世帯主は98.5%が有配偶であるのに対し、女子世帯主は55.7%の有配偶と40.5%の死別により構成されており、母子世帯の半数が夫の不在によるものである。これは未婚を除く女子単身世帯と同じ構造を示している。最後に拡大家族世帯についてみると、親子世帯と同様に78.5%の男子世帯主が有配偶である。女子世帯主は有配偶率が低く36.9%で、死別の割合が50.8%と高い割合を示している。拡大家族世帯において男子世帯主が死亡する場合、おもにその配偶者が世帯主になるものと考えられる。また、夫と



死別した場合には親族を世帯に受け入れて拡大家族世帯に推移しやすく、夫が不在の場合には夫を欠く単身世帯や母子世帯に推移すると考えられる。

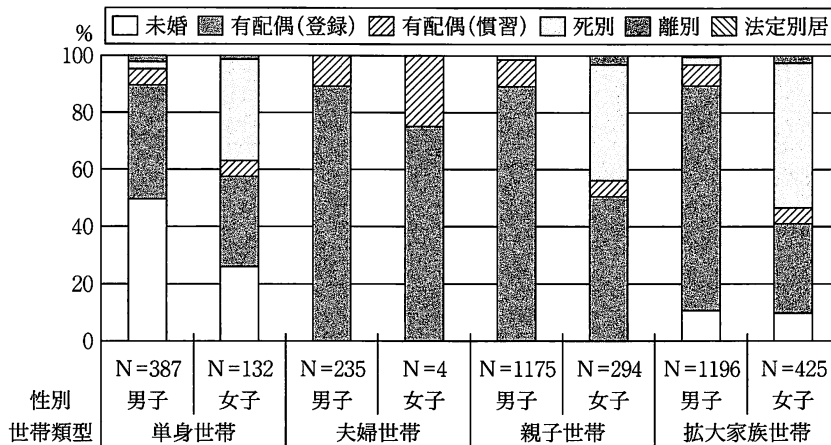


図6 世帯類型別男女別にみた世帯主の配偶関係の分布

### 3-3 世帯主の年齢

世帯主の配偶関係から、女子世帯主世帯は男子世帯主世帯に比べて多くの割合が夫の不在や死別によって成立している。この結果から世帯主の年齢は男子世帯主世帯に比べて女子世帯主世帯の方が高いものと予想される。図7は世帯主の年齢別の世帯数を男女別に示しており、表2は世帯類型別の世帯主の平均年齢と標準偏差を示している。図7をみると、男女ともに最も世帯数が多い年齢は50-54歳でそれぞれ445戸、111戸であった。しかし、男子世帯主世帯で300世帯を超える年齢層が35-59歳であるのに対し、女子世帯主世帯で80世帯を超える年齢層は40-69歳と男子世帯主世帯に比べて女子の世帯主年齢の高いことがわかる。表2の男女別の平均年齢をみると男子世帯主世帯全体の平均年齢が49.3歳であるのに対し、女子世帯主世帯のそれは54.5歳と5歳上回っている。世帯類型別にみると、両単身世帯、その他の拡大家族世帯において男女差が9歳以上あり、それらの類型において夫の不在または死別によって女子が世帯主となることの影響が大きい。男子世帯主世帯についてみると、世帯主の平均年齢は両単身世帯、親子世帯、横およびその他の拡大家族世帯、父子世帯、夫婦世帯、縦拡大家族世帯の順に増加しており、単身から2世代の世帯に拡大し、その後夫婦世帯または3世代の世帯に推移する世帯の変遷が反映されている。女子世帯主世帯についてみると、世帯数の少ない夫婦世帯、親子世帯を除くすべての世帯分類について女子世帯主の平均年齢が50歳以上となっているが、その他の単身世帯、その他の拡大家族世帯が57歳台、縦拡大家族世帯が60.3歳と、高齢化によって直系の家族と同居できない場合は親族または非親族と同居することを選択している。男女ともに縦拡大家族世帯の平均年齢が最も高く、この世

帯類型において年長者の多くが世帯主であることを反映している。

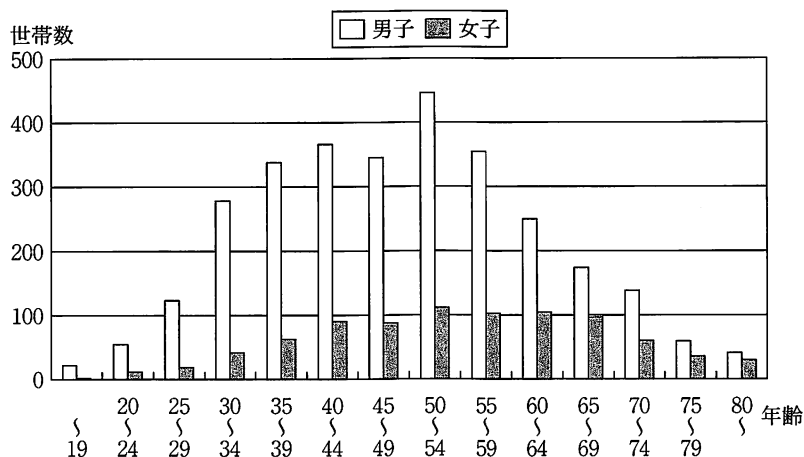


図7 世帯主の男女別年齢別の世帯数

表2 世帯類型別世帯主の平均年齢と標準偏差

	男子世帯主世帯		女子世帯主世帯		全世帯	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
完全単身世帯	43.5	15.6	52.8	15.5	45.7	16.0
その他の単身世帯	42.2	15.3	57.4	15.8	46.2	16.8
夫婦世帯	54.6	15.4	34.3	8.0	54.3	15.5
親子世帯	48.3	11.4	46.1	9.5	48.3	11.3
母子世帯	—	—	51.8	14.2	51.8	14.2
父子世帯	54.4	12.5	—	—	54.4	12.5
縦拡大家族世帯	58.0	13.3	60.3	12.1	58.7	13.0
横拡大家族世帯	49.2	10.4	52.8	11.6	50.0	10.8
その他の拡大家族世帯	47.6	17.1	57.1	15.6	50.2	17.2
全体	49.3	13.8	54.5	14.2	50.5	14.0

図8に示すように民族別の世帯主の年齢分布についてみると、バーガー以外の民族では半数の世帯主の年齢が40-59歳である。60歳以上の世帯主割合に比べて40歳未満の割合が高かったのはキャンディアン・シンハラ、インディアン・タミル、マレーとその他の民族で、それぞれ32.5%、26.9%、30.0%、36.0%であった。マレーを除く民族別の世帯類型において、単身世帯や夫婦世帯などの家族規模の小さい世帯の割合が高いことと世帯主の年齢が低いこととは関連があるものと予想される。これに対し、マレーは拡大家族世帯の割合がすべての民族のなかでも最も高い53.3%を示しており、単身世帯と夫婦世帯を合わせても8.3%と極めて低く、それ以外の民族とは異なる傾向をもつことがわかる。

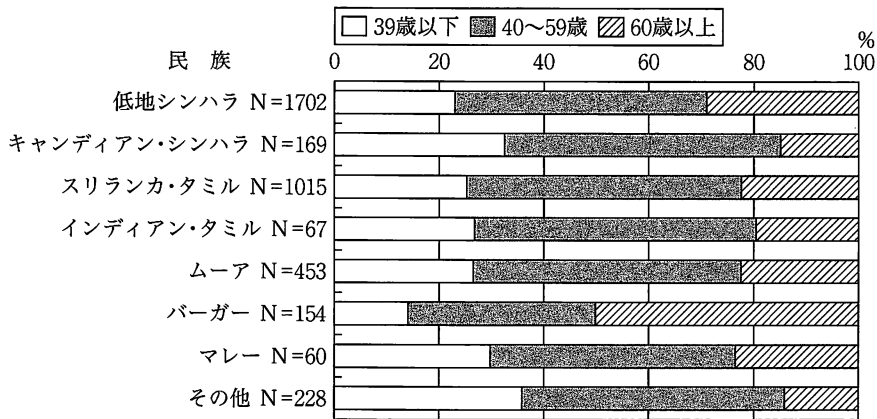


図8 民族別に見た世帯主の年齢分布

#### 4 世帯員の特徴

##### 4-1 世帯類型別人口分布

次に、全人口を対象に帰属する世帯類型別の人口分布についてみよう。表3は9区分世帯類型別の人口とその割合および平均世帯員数を示している。人口割合が最も高い類型は世帯の割合の場合と同様に親子世帯(29.1%)であるが、拡大家族世帯は合計で53.7%を占め、人口の半数以上が拡大家族に帰属している。平均世帯員数についてみると、全体では5.31人と農村部の4.28人(松下：1999、p.141)の例と比較すると都市部の世帯規模の方が1人大きい結果となった。世帯類型別にみると、単身世帯から拡大家族世帯へと続柄の構成が拡大するほど世帯規模が大きくなっている。特に3世代世帯を示す縦拡大家族世帯の規模は8.24人と大きい。

表3 世帯類型別人口割合と平均世帯員数

世帯類型	世帯員		平均世帯員数 人
	人	%	
完全単身世帯	223	1.1	1.00
その他の単身世帯	1,089	5.3	3.68
夫婦世帯	750	3.7	3.14
親子世帯	5,957	29.1	5.33
母子世帯	1,097	5.4	3.99
父子世帯	347	1.7	4.51
縦拡大家族世帯	3,618	17.7	8.24
横拡大家族世帯	4,813	23.5	6.91
その他の拡大家族世帯	2,558	12.5	5.27
合計	20,452	100.0	5.31

次に、図9、図10に示された男女年齢別・帰属する世帯類型別人口の割合についてみよう。まず図9の男子についてみると、0-9歳では親子世帯と拡大家族世帯に帰属している

が、年齢が上昇するにしたがって単身世帯割合が増加し始め、40-59歳になると、親子世帯の割合が増加し、60歳以上になると拡大家族世帯と夫婦世帯の割合が増えている。拡大家族世帯はすべての年齢において最も高い割合を示し40-49歳の44.1%から80歳以上の63.6%の間を推移している。この図からも各個人が加齢するにしたがって世帯類型間を推移する様子が示される。

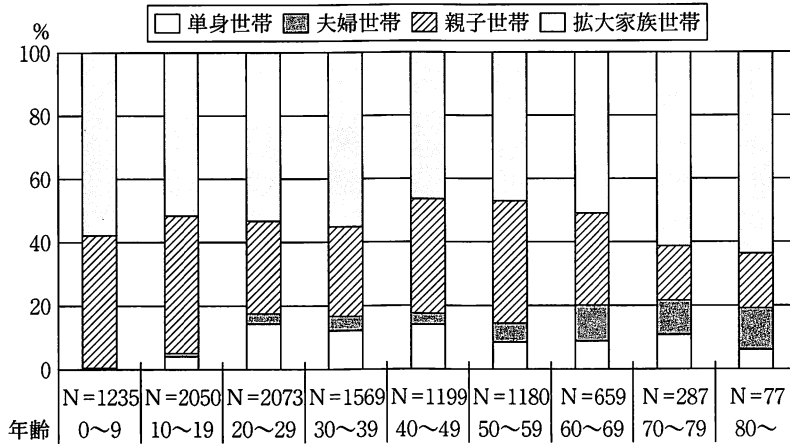


図9 年齢別にみた帰属世帯類型別の人口分布（男子）

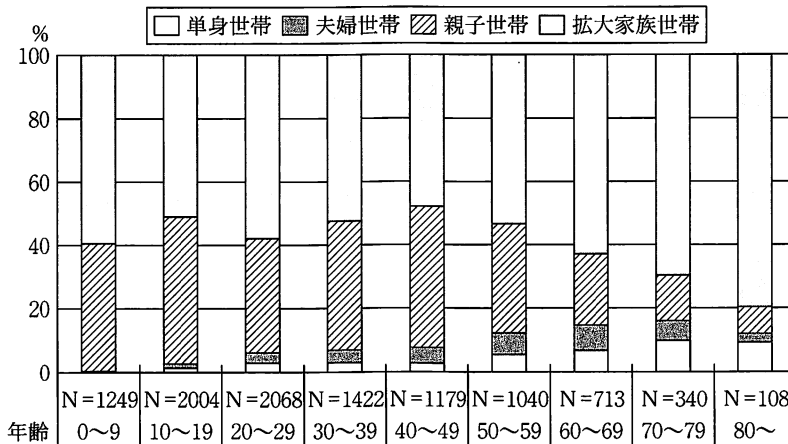


図10 年齢別にみた帰属世帯類型別の人口分布（女子）

図10の女子についてみると、そのほとんどが親子世帯と拡大家族世帯に帰属しているが、50歳を超えるとその割合は小さいが単身世帯と夫婦世帯の割合が増加している。拡大家族世帯はすべての年齢においてほぼ二分の一以上を占めているが、特に60歳を超えるとその割合は増加し始め、80歳以上では79.6%がこれに帰属している。男女ともに高齢期において拡大家族世帯に帰属する傾向をもつことがわかる。しかし、農村部の結果（松下：1999、p.142）

と比較するとその割合は小さく、それとともに単身生活者の割合の大きいことが都市部の特徴といえる。

図11は、民族別に人口の年齢分布を示している。バーガー以外の民族は40歳未満人口が全体の65-73%を占め、60歳以上の高齢人口は7-12%の間を占めている。バーガーは他の民族とは異なる特徴をもち、60歳以上の高齢人口の割合が29.5%と最も高く、高齢化が進んでいる。先にみたようにバーガーの世帯主年齢が特に高いのはこのためである。

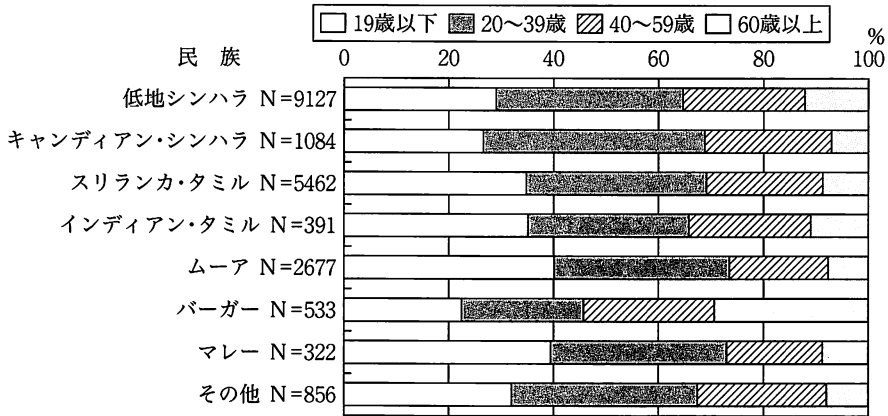


図11 民族別にみた人口の年齢分布

図12および図13は、男女年齢別にみた世帯主との続柄別の人口割合を示している。図12の男子についてみると、20歳までは60%以上、20歳代でも39.9%が同居子として世帯に帰属しているが、30歳以上になると世帯主の割合が最も高い。70-79歳では世帯主の割合が最も高い68.3%であったが、80歳以上になると、世帯主が51.9%にまで減少し、親族の割合がそれぞれ15.7%から33.8%まで増加している。この結果は、この年齢期に世帯主の世代交代が生

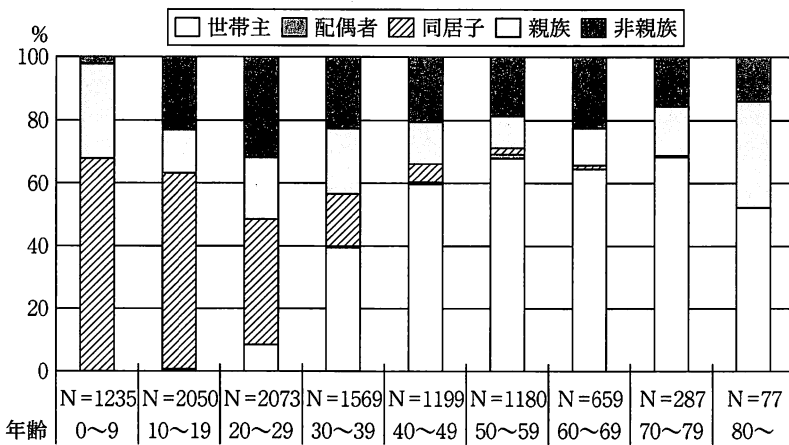


図12 年齢別にみた世帯主との続柄別の人口分布 (男子)

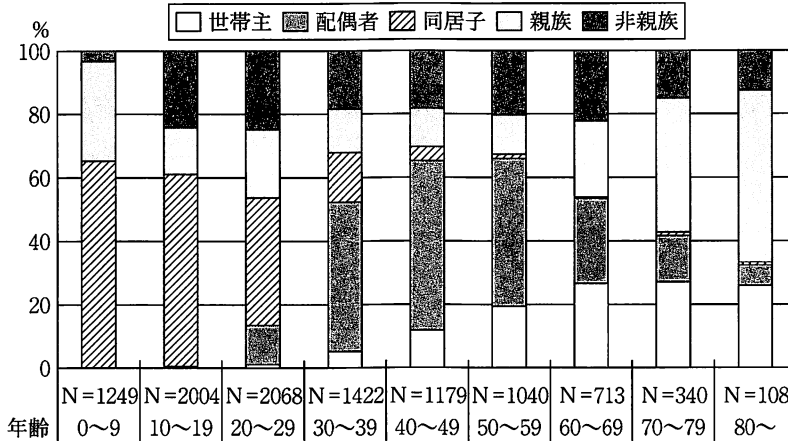


図13 年齢別にみた世帯主との続柄別の人口分布（女子）

じていることを示している。

図13の女子についてみると、男子の場合に年齢の上昇に伴い同居子から世帯主に独立していくことと同様に、同居子から配偶者として独立していく様子がみられる。30-59歳までは配偶者の割合が45%を超えているが、60歳を超えると世帯主と親族の割合が増加しており、男子とは異なる傾向がみられる。60歳以上で世帯主となる割合は26-27%で変化していないが、親族の割合は60-69歳の24.1%から70-79歳の41.8%、80歳以上の53.7%と年齢の上昇に伴い大きく増加している。夫と死別後に自らが世帯主となる女子が四分の一を占める一方で、多くの女子は子供や親族の世帯に身を寄せていることが示されている。

図14に示された民族別の世帯主との続柄についてみよう。まず、キャンディアン・シンハラとインディアン・タミルは非親族の割合が他の民族に比べて非常に高く、それぞれ40.8%、37.3%を占めている。その一方で、同居子および親族の割合が他の民族に比べて低い。単身でコロンボに移動し、召使やメイドのような住み込みの仕事に従事したり、親族ではない世帯に身を寄せたりしているものと思われる。他方で、図5に示されるように単身世帯の割合も高い。親族の割合が高いのはムーア、バーガー、マレーであり、中でもムーアとマレーは同居子の割合が高い。これは年齢分布において両民族における20歳未満の人口割合が最も高いことから、出生力が高いことと親族を含めた横拡大家族世帯が多いことが予想される。バーガーとその他の民族は、世帯主の割合が他の民族に比べて約10ポイント高く、バーガーは同居子と親族の割合が4.3ポイントしか差がなく、その他の民族では同居子が33.4%と高い。バーガーの人口高齢化が進んでいることから縦拡大家族世帯の多いことが予想され、その他の民族は核家族世帯を中心とする規模の小さい世帯の多いことがわかる。低地シンハラとスリランカ・タミルの続柄別の人口構成はよく類似している。

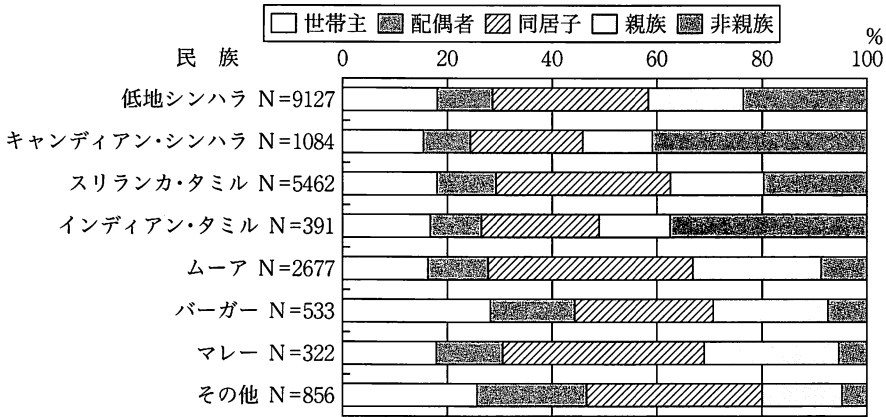


図 14 民族別にみた世帯主との続柄別の人口分布

4-2 同居子の特徴

世帯主との続柄において同居子が30歳まで高い割合を占めていることがわかった。そこで、世帯類型と同居子の年齢についてさらに詳しくみよう。同居子がいる世帯類型は親子世帯、母子世帯、父子世帯と縦、横の拡大家族世帯の5類型である。同居子のいる世帯数は2,605戸あり、全世帯の67.7%にあたる。各世帯で20歳以上の同居子がいる世帯とすべての同居子が20歳未満である世帯とを区分する。さらに、配偶者について同居、不在、離死別等の同居状態により区分すると、図15に示されているように各世帯類型における同居子と配偶者の同居状態を6つの類型で表すことができる。親子世帯は配偶者が同居しているのので、同居子の年齢区分による割合のみが示されている。親子世帯においては20歳未満の同居子をもつ世帯の割合が63.0%と高い割合を示しているが、農村の例ではその割合が83.1%を占める例（松下：1999、p.141）と比較すると、都市部においては成人子の親世帯からの独立が遅く

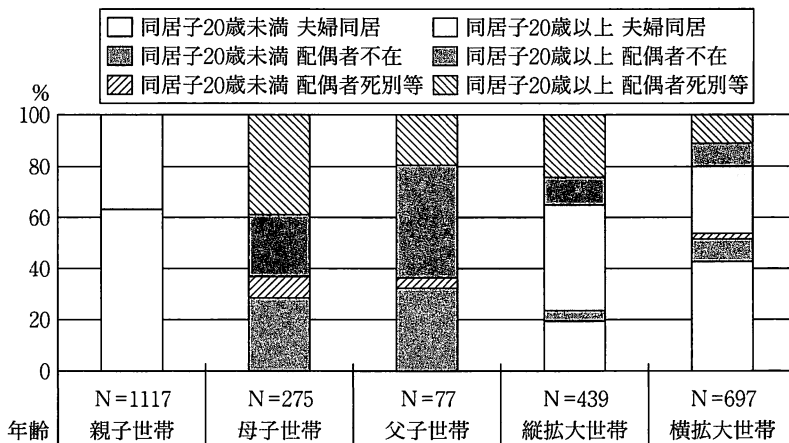


図 15 世帯類型別にみた同居子の年齢と配偶者の同居状態

なっている。

次に母子世帯と父子世帯を比較してみると、配偶者が同居していないことの理由の差はあるが、20歳以上の同居子をもつ世帯の割合がともに60%を超えており、片親世帯において子供が独立せずに同居し続けていることがわかる。最後に2つの拡大家族世帯についてみると、縦拡大家族世帯において20歳以上の同居子の割合が高く、76.2%を占めている。これは先にみたように、親が高齢化しても世帯主を続ける一方で、縦拡大家族世帯における同居子は第2世代にあたり、すでに有配偶の状態にあり、さらに子供をもっているため、同居子の年齢が比較的高くなっている。横拡大家族世帯において同居子が20歳未満かつ夫婦の同居する世帯の割合が42.6%と高いが、それでも同居子の年齢が20歳未満の世帯は全体の約半数を占めるにとどまる。

### 3 おわりに

本論では、1981年に実施された人口センサスのデータを利用し、コロombo市における世帯構成の特徴を明らかにすることを試みた。世帯類型の分類に関して問題点を残しているものの、データを再集計することにより世帯に関する情報を得ることが可能であることを示した。農村部との比較、性別、年齢別、または民族別による比較により、世帯構造の特徴を明らかにするだけでなく、都市部の居住環境や人口動態、ライフサイクルでみた世帯構造の変容を推測させる結果を示した。

コロombo市内の2つの町においては、拡大家族世帯の割合が高く、半数の人口がこの世帯に帰属している。女子世帯主世帯は母子世帯が多く、女子世帯主世帯が成立する理由の多くは死別によるものであった。このため女子世帯主世帯は男子世帯主世帯に比べ平均世帯主年齢が高い。全体の世帯主年齢の平均は単身世帯を除いて50歳前後と比較的高かった。これは同居子の独立が比較的遅いことと、拡大家族世帯における世代交代が遅いためである。

世帯員に関して目を向けると、加齢に伴い拡大家族世帯に帰属する割合が高くなる一方で、単身または夫婦世帯の割合も他の年齢層に比べ高くなり、分化する傾向がみられた。母子または父子世帯において成人している同居子の割合が高く、片親の世帯においては子供の独立が遅れている。

民族別にみると、キャンディアン・シンハラとインディアン・タミルは非親族として世帯に帰属する人口の割合が高く、独立した世帯を形成する場合は単身世帯や核家族となる割合が比較的高い。これに対し、世帯主年齢が比較的若いムーアやマレーは横拡大家族世帯となる傾向にある。縦拡大家族世帯の割合が高いバーガーは人口の高齢化が進んでいる。60歳以上の世帯主の割合が少ないその他の民族は、拡大家族世帯の割合が少なく、単身世帯、夫婦



世帯の割合が他の民族に比較して高いことが特徴的であった。

このように世帯、世帯主および世帯員の特徴をさまざまな比較によって明らかにすると同時に、世帯構造に関する研究における課題も浮き彫りにした。年齢別の人口の推移についてみると若年層の人口が明らかに少なくなっている。このような出生力の低下あるいは居住環境の制限が同居子の動向に与える影響、さらに都市への流入人口が世帯構造に与える影響など、スリランカの人口動態や都市環境を考慮した検討がさらに必要となるであろう。

#### 参考文献

Department of Census and Statistics, *Census of Population and Housing 1981*, 1986.

松下敬一郎「スリランカ農村の世帯構成の特徴」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』創刊号1999年。

松下敬一郎「Rassapana 村の人口・世帯構成の変化1988-96年」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』第2号2000年。

西村教子「スリランカ・コロンボ市の人口移動に関する考察」国際開発学会全国大会2001年。